

森有禮の「脱亜・入欧・超欧」言語思想の諸相

——(2)「英語採用論」言説の「誤読」の系譜——

小林 敏 宏

前稿〔(1)「森有禮の「日本語 対 英語」論再考」¹⁾〕においては、ホイットニー宛書翰のテキスト分析をすることによってこれまであまり触れられてこなかった森の「望ましい言語改革」²⁾の「内実」を考察した。そしてその究極の目的が「(簡易)英語採用=日本語廃止論」ではなくむしろ「大日本帝国言語(皇国言語)創出論」にあったという「仮説」を提出し、それを当時の一次資料をもとに論証した。小論(=本稿の(2))では、森の言語改革の意図とは相容れない「英語採用論=日本語廃止論」という言説がいったいどのようなルートを経由し「定説」化されていったものなのかについて明らかにしていきたい。

I. ホイットニーから森への書翰(明治5年5月24日)³⁾

前稿で詳述したように、森の言語戦略(目的)であった「皇国言語」創出のための“戦術(手段)”が日本語の話し言葉の「ローマ字化」と「(簡易)英語採用」であったのであるが、この手段の後半の部分(「簡易英語」)だけが「日本の言語のローマ字化」問題から切り離され、それが「英語採用論=日本語廃止論」として解釈されるようになった。多くの資料を再検証しながらその「始まり」を辿っていくと、それは「ホイットニーの森への書翰」のテキスト中に存在することが判明する。「(簡易)英語採用」論が「日本語廃止」論として初めて言説化する契機はホイットニーが森への返信の中で行なった「推定」解釈(presumption)の中に見出すことができるのである。あくまでもホイットニーは森の言語政策の真に意図するところを正確に読み解こうとしたのであるが、その「解釈」とレトリックはその後思わぬ展開を引き起こすことになる。ホイットニーは冒頭で簡単に「前置き」を済ませた後、次のような「仮定法」を用いた「推論(surmise)」から議論を始めている。

*“Were the Japanese merely seeking a best language to put in place of their own, they would want to look carefully through the world, ancient as well as modern, and choose, after a mature weighing of the merits of many dialects. The history of languages, also, shows this consideration to be of minor consequence. There have been many instances in the world of a people’s abandoning its ancestral speech and adopting another ; but so far as I know, it has always been under the influence of the superiority in culture of the speakers of the other language—usually, indeed, aided also by political supremacy or social preponderance. The people in question has, as it were, by adoption of another language, joined itself on to another community, linking its cultural progress with that of the latter. So I imagine it would be with the Japanese. . .”*⁴⁾ (太字斜体強調は筆者)

(もし日本人が単に最良の〔ヨーロッパ〕言語の採用を自国語と取り替えるために考えているとするならば、まずは世界の言語事情を注意深く調べることが必要になると思われます。現在の言語状況だけでなく過去においてもそれがどうであったのかを見てゆき、土着語の多くの利点についても十分に考慮することが必要です。たしかに言語の歴史の中ではこうした考慮もそれほど必要にならないケースもあります。実際に世界ではこれまでに、先祖から用いている自国の言語を捨て、別の言語を採用した例も数多くあります。……日本もおそらくそうしたケースにあるものと推察いたします。)

なぜ、ホイットニーはこのように森の意図する言語改革の意味を「推論」することから始めなければならなかったのか？ その大きな理由は森自身がホイットニーへの書翰の中で、「日本語」の「ローマ字化」と「簡易英語」の導入 (introduction / adoption) の意味と、森の考えていた「望ましい言語改革」の手続きについての説明を十分に行なっていなかったことにある。その結果、ホイットニーは森が「ゆくゆくは日本国民は先祖から使ってきた“日本語”〔漢字 (Chinese) とともにやまと言葉 (Japanese)〕までも完全に放棄 (abandon) し、「簡略英語」をもって日本の「国語」にする計画を立てる」つもりでいるのではないかと推察す

ることとなったのである。

ここで我々が注目すべき点は、ホイットニーが「自国語を他言語によって取り替える (put in place of their own)」とか「自国語を捨て (abandon), 他言語を採用 (adopt) する」と森の提案を解釈していることである。このロジックはホイットニーの議論の最後の最後まで“substitution (入れ替えまたは代用)”という言葉になって繰り返し登場する⁵⁾。森自身、ホイットニーに宛てた書翰の中で、西洋言語を「導入 (introduce)」または「採用 (adopt)」したい、とは述べているが、しかし“日本で古くから用いてきた言葉を「廃止 (abandon)」する”というような言及は一度もしていない⁶⁾。(森は disuse という表現は用いたがそれは「廃止」の意味では全くないことはすでに本稿の(1)で論証した通りである。)⁷⁾

なるほど、森の書翰をつぶさに調べると森は確かに abandon と substitute という単語は 1 度ずつ使っていることが確認できる。しかし、その単語の使われる文脈と内容が“自国の言語を「廃止」する”というようなものとは全く異なっていることを知る必要がある。まず森が abandon という語を使った唯一の文は次のようなものである。

“In spelling, I propose merely to complete what all English and American Lexicographers, from Dr.Samuel Johnson, down to the authors of the changes, contained in the latest editions of Walker’s, Webster’s and Worcester’s Dictionaries, all commenced, but timidly **abandoned**.”⁸⁾

(太字強調は筆者)

(綴りに関して 1 つ提案したいことがあります。それはサミュエル・ジョンソンから始まり、ウォーカー、ウェブスター、ウスターなどのこれまでのすべての英米の辞書学者が試みては臆病にも放棄してしまっただけの [正書法改革の] 仕事を完成させたいということでもあります。)

ここで森が使っている abandon という意味は、“日本語を「廃止」する”ということとは全く関係がなく、英米の語彙学者たちが“「諦めて放棄した」仕事”を引き受けようという内容で用いられるのである。

また substitute という単語を使っているのは次のような文章である。

“I propose, for example, to **substitute** Seed for saw and seen...”⁹⁾ (下線太字強調は筆者)

(私の提案を例に挙げれば、それはたとえばSeedをsawやseenに替えて用いるということである。)

ここで森は英語の語彙の不規則性の改革に関する具体例を挙げた際に、ある英単語を「不規則Aを規則的なBに代用したほうがいい」という文章で用いている。これはどう読んでも「日本語を英語によって“入れ替える (substitute)”」という意味にはならない。しかし、それにもかかわらずホイットニーは、このabandonとsubstituteという言葉で森とは全く違った議論(文脈)の中で用いている。ホイットニーはこれらの用語(keywords)によって様々な「誤読」を誘発させるセマンティックな「磁場」を作り出し、その上に自らの議論を展開させている点を我々は見逃してはならない。なぜなら森の言説が「英語採用論＝日本語“廃止”論」となる契機はまさにここに「始まっている」からである。

ある言葉がもつ多義性〔様々な意味^{イメージ} (connotations)〕が錯綜し合うテクスト内には常に「誤読」が生じる可能性が秘められている。その点において、ホイットニーが引き起こしている用語の「転用」解釈も意味論(semantics)領域の問題であるといえる。彼の「誤読」のプロセスは次のような「流れ」に沿って生み出されていく。まず、「森のホイットニーへの書翰」の主旨(西洋言語の日本への「導入 (introduce)」または「採用 (adopt)」に関する提案)をホイットニーも“on the adoption of the English language in Japan”として「正確」に了解している。そのことは『日本の教育』に掲載されている森宛の書翰の「表題」からもとりあえず確認ができる¹⁰⁾。しかし、その“adoption”の捉え方が問題である。上述したように、森は「ホイットニーへの書翰」の中でabandonとsubstituteという単語を用いているのであるが、それは上に見たように「正書法改革の試みを断念する」や「単語の代用」という意味で使っている。ところがこれに「間テクスト性 (intertextuality)」作用¹¹⁾が加わってくると問題は深刻化する。森が使ったabandonとsubstituteという単語は「廃止する」「AからBへ乗り換える」という意味をも喚起する単語であることから、ホイットニーはこの“the adoption of the Eng-

lish language in Japan” という〈概念〉の中で、森の使った abandon と substitute に対するセマンティックな言葉の「転用」を行って行くのである。その結果、ホイットニーは森の「英語の採用 (adoption)」という意味を「日本語の廃止 (abandon)」と「英語による入れ替え (substitute)」と読み取っているのである。

なぜホイットニーは森の言語戦略の「真の狙い」¹²⁾ に接近した際に、森が使った言葉の意味を自らの「解釈」の中に「転用」していったのであろうか？ 冒頭にも述べたように、その理由を導き出すヒントは「ホイットニーの森への書翰」の中に存在する。まず彼は森の「望ましい言語改革」の二段構え（日本語の話し言葉のローマ字化+簡易英語採用）の関係性が明示的には説明されていない森の提案（「ホイットニー宛書翰」）を、言語学者の立場から「了解可能」なロジックへと整合性をつけるために「推定」によってテキストを厳密に分析し、考え得るだけの可能性 (possibilities) を導き出す必要があった。そしてそれら一つ一つの可能性に対してホイットニーは「もし (森氏が) この英語採用の方法をこう考えているのだとしたら、このような理由でこうしたほうがよろしい」という仮定 (conditional) の形式で返答している点がポイントである。さらに、彼の議論の「各論」はすべて、冒頭の「仮定法」によって言い表された「総論 (英語採用=日本語廃止)」の上に展開されている。「各論」は次の4つのポイントに整理することができる。

- ① 「簡易英語」への否定的な意見
- ② 「日本語のローマ字化 (漢字の廃止)」への賛意
- ③ 教育における「日本の土着語」の可能性
- ④ 「教養言語」としての英語の役割

これらの助言の内容を読むかぎり、ホイットニーは「推定」により森が考えていたであろう言語改革の射程の大枠までは接近しているといえる。しかし森が提案していた①「簡易英語採用」と②「日本の言語自体のローマ字化」を“セット”にして企てていた「望ましい言語改革」の可能性についてはほとんど触れていない。これは、森の提案に対しホイットニー自身も結局のところはその「真の目的」がはっきりとは読み取れなかったことを示している。言語学の世界の権威であったホイット

ニーでさえも、世界史上前例のない森の言語戦略の意図までは解読することが出来なかったようである。その最大の理由は、森の言語改革の本質が「脱亜・入欧・超欧」¹³⁾ という重層的な位相をもっており、それが当時において（否、現在においても）あまりにも“独創的”であったからであり、また同時に、それが「西洋言語」に対する一種の「挑戦」でもあったからである。それもそのはず、「森のホイトニー宛の書翰」の内容のほとんどが、「土着語のローマ字化」についてではなく「簡易英語」の問題に割かれており、一見するとそれは「日本語改革」案というよりは「英語改造」論と呼べるような内容にさえなっているからである。したがって、ホイトニーが、非英語話者であり日本人である「森自身が大胆にも英語国民の言語を改革してみせる」¹⁴⁾ という英語国民への「挑戦」に対し“不愉快 (offensive)”¹⁵⁾ である”と述べたことは無理もないことであった。ホイトニーは返信においてどうにかして英語国民の代表としても森の「英語改造」を思いとどまらせようとしたに違いない。いずれにしても、ホイトニーは森が書翰で述べた「土着語のローマ字化」には賛同するものの「簡易英語の全面採用」については最後まで反対しているのである。

しかし、ホイトニーは①と②を論じた後で現実的な言語政策として③土着の言葉 (native speech / vernacular) による教育の重要性について訴えている。この点については、森自身がホイトニー宛の書翰の中で「土着系の日本語による教育機関 (schools of the Japanese language) はどうしても必要である (greatly needed)」¹⁶⁾ と述べている点とほぼ一致している。ホイトニーは「土着系の言葉の尊厳を守りつつ〔不足している語彙を〕強化してゆくこと (the ennobling and enriching of the native speech)」¹⁷⁾ が必要であると力説するのである。しかし、森はホイトニーに“助言”されるまでもなく、「皇国言語」の母体はあくまでも「土着の日本語の構造」に据えつつ、「土着語のローマ字化」によって「簡易英語の採用」との親和性を高め〈語彙〉不足の問題を解決しようと企てていたことは本稿の(1)ですでに論じた通りである¹⁸⁾。こうした助言をホイトニーがわざわざしていることから、彼が森の書翰の前半に出てくる「望ましい言語改革」の「真の狙い」は理解できていなかったことが読み取れる。だからこそ、ホイトニーは返信の中で、森が「望ましい言語改革」として言及した「土着系の日本語のローマ字化」

と「簡易英語採用」との組み合わせによる言語改革の可能性について一言もコメントをしていないのである。ホイットニーは書翰の冒頭で「推定」表現を用いて議論を開始しているが、そうした論述の仕方からみても、ホイットニーは事実上森が「日本語を廃止」して「簡易英語」と入れ替えようとしているにちがいない、と考えていたといっていよう。それはホイットニーが書翰の最後に「あなたご提案なさっている日本語と簡易英語の入れ替え (the substitution that you propose)」¹⁹⁾ という表現によっても確実に裏付けられる。

このようにホイットニーが森へ宛てた返信の中で展開されている議論の大前提は「(簡易) 英語採用論 = 日本語廃止論」という図式である。そしてそれは書翰の冒頭の「仮定」表現の中に表現されている。

後に、この「ホイットニーから森への書翰」は、森自身の要請によって『日本の教育』(明治6年)の中に収められることになる。そしてこの書籍の「序文」の中で森はその後議論を巻き起こすことになる 'dis-use' という表現も用いている。したがって我々は、「英語採用論 = 日本語廃止論」の「定説」化の端緒は、この「ホイットニーから森への書翰」が一般公開されたことによってこの同書内において「生起」したと断定することができる。とはいえ、ホイットニーの言説はあくまでも「推定」に留まっており、その表現も「仮定法」を用いて非常に慎重な手続きを踏んでいることから、ホイットニー自身が「英語採用論 = 日本語廃止論」言説を事実上「定着」させた「最初の人物」ということはできない。しかしそれでもこのホイットニーによって森が使った abandon / substitute という用語の「転用」解釈がおこなわれたことが後々にわたって「英語採用論 = 日本語廃止論」を「固定化 (perpetuate)」させる引き金になっていることに我々は注目しておく必要がある。

ここで再度確認しておくべきことは、森が最初に考案した「望ましい言語改革」である「土着の日本語のローマ字化」と「簡易英語」の組み合わせによって日本帝国の「新しい言語」²⁰⁾ を創出するという構想は、この『日本の教育』(明治6年)の段階においては方法論上において事実上すでに「破綻」していたということである。その結果、森自身の当初の提案が綴られた「ホイットニーへの書翰」(明治5年)は『日本の教育』において一般公開されなかったという事実がポイントである。つまり、そこには森とホイットニーとの往復書簡がセットで掲載されてはお

らず、「破綻した」森の「書翰」は取り除かれて、ホイットニーの森への返信だけがズームアップ (highlight) される形で公開されていることである。ここに森の「誤算」があった。先に見たように、ホイットニーはその書翰において森がそこまでは意図していなかったはずの「日本語廃止論」までに波及する議論 (“inducements”) ²¹⁾ が展開されていたからである。森がいったいどのような「言語改革」を構想していたかを最後まではっきりと理解することができなかったホイットニーが、「推定」解釈によって論じたその森への提言は、その後まもなくロンドン在住の一人の同胞 (日本人) によって再び「誤読」され、それが半ば「事実」化されていくことになるのである。

Ⅱ. 馬場辰猪の森批判：『日本語文典』の「序文」(明治6年)

『日本の教育』(明治6年)に掲載された「ホイットニーから森への書翰」が「英語採用論＝日本語廃止論」の言説の創出と固定化に拍車をかけることになるとはおそらく森は予想だにしていなかったはずである。この森の「英語採用論」言説に最も激しい反論を展開したのは、同胞であり留学のためにイギリスに滞在していた馬場辰猪である。『日本の教育』の序文 (以下『序文』とする) にある森のいわゆる「英語採用論＝日本語廃止論」といわれる文章¹⁾ と、同書内に掲載された「ホイットニーの森への書翰」を馬場が初めて読んだのは、それが出版されてから間もない時期であったと考えられる²⁾。彼は森の「日本語 対 英語」論に反駁するためにみずから英文で書き上げた『日本語文典』(An Elementary Grammar of the Japanese Language, with Easy Progressive Exercises, London, Trubner&Co., 1873 (1873. 以下、『文典』)) を明治6年の秋に英国にて出版した。馬場はこの『文典』の「序文」(≠『序文』)において、森の「日本語 対 英語」論への反論をおこなっている。その「序文」の内容の流れは次の5つのポイントに整理することができる。

- ① 『日本語文典』の目的
- ② 日本の言語の「文法の有効性」と「語彙」問題
- ③ 「時間の浪費」問題
- ④ 「社会の二極化」問題

⑤ 「教育言語」としての「母（国）語」の重要性

馬場は⑤を訴えるために①（目的）を設定し、議論を②③④の3つの論点を軸において立論し、その中で先に見たホイットニーの用語の「転用」とその推定「解釈」を「再生産」していくことになるのである。

それでは以下に、馬場がいかにホイットニーの展開した「推論」を足場に自らの議論を“膨らませていった”かを探っていくことにする。

2-1) 「日本語“廃止”論」言説の「事実」化

まず『日本語文典』の書き出しが衝撃的である。馬場は云う――

“We have two objects in publishing this book – the first, to give a general idea of **the Japanese language as it is spoken**; and the second, to protest against a prevalent opinion entertained by many of our countrymen, as well as foreigners who take some interest in our country, and to show the reasons why we do so. It is affirmed that **our language is so imperfect that** we cannot establish a regular and systematical course of education by means of it; and **that the best way is to exterminate the Japanese language altogether, and to substitute the English language for it.**”³⁾ (下線太字斜体強調は筆者)

(我々は2つの目的をもってこの本を出版している。1つは、日本語の話し言葉とは一体どのようなものであるかについて概説すること。2つめは、日本の知識人や日本に関心をもつ外国人たちによって広く支持されつつある意見に対する反論をするためである。その意見によれば、我国の言語はあまりにも不完全であるので、規則的で体系的な教育などは自国の言語では到底施せないで、最善の策は日本語を完全に廃止し、英語をもって自国語とするというものである。)

まず馬場は冒頭でこの『文典』の目的は日本の「話し言葉」の有り様と、同胞の日本人たちによって唱えられている「日本語」論についての反論を目的としていると述べている。この「同胞の日本人」と「日本

語」論というのは具体的にはこの後にすぐ言及される森有禮とその言語政策を指している。そして馬場は森の「英語採用論」が「日本語を完全に廃止し、そして英語をもって自国語とする」暴論であると激しく非難するのである。ホイットニーは abandon / substitute という言葉を森の解釈とは別の「意味 (“put in place of their own”）」によって「転用」することで「英語採用論」を「解釈」したのだが、馬場に至ってはそれよりもさらに強い exterminate (完全放逐) という表現になっている。そしてこのロジックはやはり、ホイットニーと同様に馬場の原文においても substitute という言葉によって最後の最後まで繰り返し登場する⁴⁾。さらに exterminate という表現は、supplant our language by the English tongue, give up their native tongue, discard it と「廃止」を意味する別の単語によって次から次へと形を変えて現れる。これらはいずれも森が一度も使ったことのない単語である。これらの事実は、明らかに馬場もホイットニーと同様に、森が提案した「我々の言語 (our language)」の「望ましい言語改革」を理解し損ねていることを示している。森が「廃止」したいといったのは、馬場が必死に擁護しようとしている「我々” (日本) の言語」である「日本の土着の話し言葉」ではなく、「日本の書き言葉」を長い間支配し続けてきた“彼ら (中国)”の文字である「漢字」であったのである。しかし馬場はそこを明らかに「読み違え」ていた。そのことは馬場の次の表現に如実に現れている。

“Mr. Mori says, ‘All reasons *suggest its disuse*,’ referring to our language. We are very sorry to say that he does not enumerate all the reasons which *suggest the disuse of the Japanese*, which perhaps would have enlightened our minds.”⁵⁾ (太字斜体強調は筆者)

(森氏は「あらゆる理由を考えてみても日本の言語である我々の言語〔「日本土着の話し言葉」〕を廃止する必要がある」と述べている。しかし残念ながら森氏は日本の言語が廃止されるべきその根拠となる説得力のある理由を十分に挙げているとは思えないのである。)

ここに読み取れるのは森が述べた “suggest its disuse” という表現に対する馬場の解釈である。前稿で詳述したように⁶⁾、森がそれによっ

て言いたかった意味は「このままでは近い将来に日本土着の話し言葉は使われなくなってしまうと予想されます」ということであり、それは「したがって、私は日本語の廃止を提案したいと考えております」ということではなかったのである。しかし馬場の解釈は明かに後者となっている。それはこのすぐ後に続く次の一節から了解できる。

“Although we admit many advantages of *supplanting our language by the English tongue*, yet at the same time we cannot help thinking that there are many reasons for *preserving the Japanese in our country as the medium of education*... Even when one nation was forced to introduce a language by the superior power of the conqueror, the former did not *give up their native tongue which they had been accustomed to speak for hundreds of years*, and which was consequently most convenient to them Hence it will be seen that there is a great difficulty in the way of *this proposed substitution*.”⁷⁾ (太字斜体強調は筆者)

(たしかに我々の言語を英語によって取り代えることの利点も多いことは事実であるのですが、しかし同時に、日本の言語を教育の手段として保存していく重要性を裏付ける理由もまた数多く存在するのではないかと考えずにはおれません。〔中略〕世界の歴史を見れば、仮にある国が征服国の強力な力によって彼らの言語を強制的に採用させられた場合でも、その国民は何百年も使い慣れてきた母国語を捨てたりはしていません。その理由は、結局のところ母国語が一番使い勝手がよいからです。〔中略〕このことから森氏たちが提案しているような「英語の採用＝日本の言語の廃止」がそう簡単に行なえるものでないことが理解できるでしょう。)

しかし、なぜ馬場はこのように早計にも「結論」を急ぐことになってしまったのであろうか？ 結論を先に言ってしまうと、その最大の理由が森がホイットニーに宛てて書いた「土着の日本語の話し言葉のローマ字化＋“簡易”英語採用」論の“原文”に直接あたることが出来なかったことにある。その結果、馬場はその内容の是非について反論するための根拠に、第三者の「解釈」を引かざるをえないことになっていたの

である。馬場が森の「簡易英語採用論」に関して手に入れることができた主な情報源は次の3つであろうと思われる。

- a) 一般に流布していた言い伝え⁸⁾
- b) 『日本の教育』の序文に書かれた森の言語問題に関する見解と同書に掲載された「ホイットニーから森へ宛てた書翰」(原文)
- c) 英語圏のマスコミ報道 (特に1873年に出版された米紙*Tribune*)⁹⁾

情報源としてa)はここでは問題の本質に関わるものではないので取り扱わないことにする。問題はb)とc)である。このb)に掲載されているのは森のホイットニー宛の手紙の原文ではなくて、その後(明治6年)に『序文』において森が熟慮の上自らの提案に対して下した「結論」にあたる一節と、それに加えて「ホイットニーから森への返信」の原文である。要するに、馬場は森がホイットニーへ提案した「(簡易)英語採用論」の原文を読むことはできなかったということだ。

また『文典』の出版時期(1873年の秋)からいって、馬場が目を通した可能性があるもう一つの情報源はc)の米紙*Tribune*である。しかしこの新聞では森がホイットニーへ宛てた「日本の言語改革」案がまたもや「編集(→誤読)」され掲載されている点が大きな問題となる。そこには森の書いた原文すべてがそのまま転載されているのではなく、記者自身の「解釈」を基に森が使っていた言葉が別の表現に言い換えられており、「森は簡易英語を日本に取りいれていくことで徐々に日本語を話し言葉と書き言葉と共に廃止していく(the gradual exclusion of our present language, spoken and written)」¹⁰⁾と書かれているのである。確かに森は原文において「簡易英語を徐々に日本に普及させる(introducing into all the schools of the Empire, and gradually into general use, a "simplified English")」¹¹⁾とは言っているが、それは決して日本の「書き言葉(漢字)」とともに土着の「話し言葉」をも「廃止」するなどという意味で森はそう述べたのではないし、そのようなことは原文の中でも一言も述べていない。ロンドンに滞在していた馬場がこの新聞の記事を読んだかどうかをはっきりと裏付ける資料は筆者が調査した限りでは見当たらないが、彼の「解釈」とその議論の展開の仕方から考えてもこの記事を読んでいても決しておかしくはないものである。

いずれにせよ、我々はまず、馬場が先に論じた森の「望ましい言語改革」を綴った原文（＝「森からホイトニーへの書翰」（明治5年））のすべてに正確に（直接）目を通すことが出来なかったという事実を確認しておくことは極めて重要である。なぜなら、それは馬場がアクセスできた主な情報源（第一次資料）が結局の所『日本の教育』（明治6年）という1冊の書籍の中に掲載されていた次の二つに絞られることを意味するからである。

- | |
|--|
| <p>I. 森が『序文』で言及した日本の言語問題に対する「現状認識（特に disuse という言葉）」の部分（これは森が「ホイトニーへの書翰」（明治5年）の中で自らの「言語改革案」を突き詰めて考えた末に導き出した見解である。）</p> <p>II. 森の「言語改革案」（明治5年）に対して書かれた「ホイトニーから森への書翰」</p> |
|--|

とどのつまり、このIとIIが書かれるきっかけの「大前提（命題）」となっていた森の「言語改革案（「ホイトニー宛書翰」）」（明治5年）は、馬場の頭の中においては最初から「消去」されてしまっており、彼は森とホイトニーがその「大前提」に対しそれぞれが「結論」として陳述した部分だけを「切り取って」いたことになる。とすれば、そこに「目にするもの」は情報源I（「結論」）と情報源II（「結論」）の並列関係となるはずである。ところが馬場にとってそれは「大前提」から導き出された「結論」部分の「並列関係」とは「写らなかつた」のである。むしろ彼の目にはその関係が情報源I（森の「主張」）に対する情報源II（ホイトニーの「反論」）という形に「見えた」のである。そうってしまった理由は、馬場が情報源IIのホイトニーの「推定」解釈をたよりに情報源Iの森の「現状認識」（“disuse”）を読み取っていたからである。情報源IIから情報源Iへと繋げていかなければならなかつたのは当然の流れでもあった。なぜなら情報源II（「ホイトニーから森への書翰」）を先に読まなければ馬場は森がホイトニー宛の手紙でどのような「主張」をしていたかを知る術がなかつたからである。しかし、不幸なことにホイトニーは、森が「ホイトニー宛書翰」においては「日本語を廃止する」といった言葉は一言も使っていなかつたにかかわらず、森への書

翰（情報源Ⅱ）においてそれを「母国語の廃止（abandon）」の提案と「推定（＝誤読）」したのである。そうした状況のもとで『日本の教育』（明治6年）においてその情報源Ⅱ（「推定」解釈）に新たに「並置（juxtapose）」されてしまったのが情報源Ⅰ（森の「現状認識（“disuse”）」）であった。こうなると情報源Ⅰで森がいわんとしたこと（“disuse” → 「日本語はこのままでは使われなくなってしまう」）は、同一情報源（『日本の教育』）の中で「並列」に配置された情報源Ⅱ（ホイットニーの「推定」解釈）の「間テキスト作用」によって、「“disuse” → 日本語を廃止したい」と「読み取られる」ことは必至であった。その結果、そこに写し出されたものは「森の「日本語廃止」の「主張」としての情報源Ⅰと、それを諷める「ホイットニーの「反論」としての情報源Ⅱという並置構造であった。

ここまで理解できれば、馬場がホイットニーの abandon / substitute の「転用」解釈を“下敷き”にし、森が『序文』で使った disuse の意味さえもホイットニーに倣って即「廃止する」と理解したことはもはや確実であるといつてよいだろう。人一倍「愛国心」の強かった馬場だからこそ彼は森のいわゆる「日本語廃止」を匂わす「無謀な」言語改革に対し憤慨し、「abandon（廃止する）」という単語よりもより強い「exterminate（完全放逐）」という感情的ともいえるような表現を使って森を糾弾しているのである。さらに、ホイットニーの「推定」解釈も、この馬場に至っては「事実」として「断定（affirmed）（p.38(43)の引用原文の下線斜体を見よ）」されてしまっている点をも我々は見逃してはならない。

このように馬場は冒頭からすでに「誤読」によって森批判を開始しているのである。ここに我々は、森の「英語採用論」を、事実上「日本語廃止論」言説として本格的に「固定化」した最初の日本人が馬場辰猪であることをはっきりと特定することができる。この点は今までに誰によっても指摘されてこなかった非常に重要な歴史的事実である。

さらにこれに加え、これまでに十分議論されていない点がある。それは森を批判した馬場の議論の論点の多くはすでに森がホイットニーへの書翰の中で指摘していたという点である。そこで我々は、次に、馬場と森の論点の共通点を突き合わせつつ、彼らの相違点がどこにあったかをも見ていくことにする。

2-2) 馬場と森の問題意識の共通点と相違点

馬場の議論の中で非常に興味深いことは、彼は森がいていた「我々の言語」とは「日本土着の話し言葉 (the spoken language) = やまと言葉 (Japanese)」であったことを正確に理解していることである。馬場は云う――、

“Before the introduction of **Chinese** we must have had **some sort of language** which served as a means of communication. Since we introduced the **Chinese classics, literature, &c.**, we have been obliged to use **Chinese words or phrases** which we could not express in **Japanese**, and so it became necessary to teach **our language** with the aid of **Chinese.**”¹²⁾ (太字強調は筆者)

(中国語 (〔漢語〕) の導入以前は、日本人も当然何かしらの言語を有しており、それできちんと社会生活が成り立っていたはずである。漢語によって書かれた経典や古典文学などを採り入れてから、我々も漢語を使わざるを得なくなったのである。なぜならそれは〔それまでの〕日本の言葉では〔概念上十分に〕表現しきれないものであったからであり、したがって、我々の言語 (〔日本土着の言語]) の学習の際にも漢語の助けを借りることが必要になっただけの話なのである。)

ここで馬場は漢語 (Chinese) が日本に導入される前は、日本にも「何かしらの言語 (some sort of language)」が存在したといい、それを彼は「中国の言語」である漢語に対して「日本の言語 (Japanese)」または「我々の言語 (our language)」と呼んでいる。

先に見たように、馬場は『日本語文典』を書いた目的は、“**the Japanese language as it is spoken** (日本の話し言葉)”である「我々の言語 (our language)」の文法の体系が教育言語として十分に耐えるものであることの実証にあった。しかしこの点において馬場と森は全く同じ考えであることに馬場は気づいていない。森が「我々の言語」と呼んだものは「中国の言語 (漢語) である書き言葉」に対する「日本土着の話し言葉」を指しており、したがって、馬場の言語観もやはり森と

同様に中国からの言語の「脱亜」思想の中にあったといつてよいだろう（森の「脱亜」思想と言語観の関係については前稿にて詳述した通りである¹³⁾）。

馬場の議論はさらに「日本の話し言葉」は日本の「書き言葉」としても十分に機能するだけの「文法体系 (grammar)」があると次のように訴えている。

“It is sufficiently perfect to teach the elements of common education so far as grammar itself is concerned... We think that our language is sufficiently systematical to accomplish these ends with certain exceptions.”¹⁴⁾ (太字強調は筆者)

(我々が普通教育を施す際でも、我々の文法は十分にその機能を備えているのである。(中略) 我々日本の言語は一部の例外を除き、これらの目的を十分に果せるだけの体系を有しているものと考えます。)

しかしながら、こういう馬場も〈語彙〉問題に関しては確かに「日本の言語」は不足していることを認めていた。したがって馬場は、日本の話し言葉（我々の言葉≡やまと言葉）の母体である〈文法構造〉は「保存 (preserve)」しつつ、それを〈語彙〉の点からも完全に仕立て上げるようにすべし、という結論を以下のように述べている――

“We think, also, that it is more desirable to try to enrich and complete that which we have already, and which is, consequently, familiar to us all, than to discard it and substitute, at a great risk, that which is entirely different and necessarily strange to us.”¹⁵⁾ (太字強調は筆者)

(また我々は、むしろすでに存在する我々の言葉の〈語彙〉を増やしていくことでそれを〔書き言葉としても〕完全なものにしていくべきなのである。結局のところ我々にとって誰にでも馴染み深い言語を用いていくべきであつて、それを廃止し、リスクを冒してまで全く異なり違和感のある言語をもって自国語とすべきではないのである。)

〈語彙〉問題に関して馬場はこのように述べているのであるが、洞察力のある読者であればこれはまさに森が「日本語 対 英語」論の中で展開した考え方にほとんど一致していることに気づくであろう。本稿の(1)ですでに論じたように、事実、森は「日本の話し言葉」の母体でもある文法構造 (structure) は当然保存し、決定的に不足している語彙の補強を「簡易英語」によって行なおうとしていたのである¹⁶⁾。森の言語政策は「日本語の母体となってきた文法構造 (structure) は皇室 (dynasty) の歴史と同じくこれからも永遠に続くものである。そして日本語の母体を保持していくことで将来〈皇国言語〉は西洋の言語とも対峙できるようになるはずである」というロジックに支えられた「日本語」観に拠って立っている。これは森が「皇国言語」創出のためには日本語の母体である内部構造は当然「保存」すべきものと考えていたことを裏付ける極めて重要な証拠となっていたことは前稿で論じた通りである。

何よりも森は『序文』を書いた目的に非常に深く関わっているのがこの「日本語」問題であると考えていた。そして言語の内部構造が話し言葉でも書き言葉でも構造は同じであることを再び次のように語るのである。

“An allusion to the subject of the Japanese language bears a most direct relation to the contents of this book. *In the style of expression, the spoken language of Japan differs considerably from the written, though in their structure they are both mainly the same.*”¹⁷⁾ (太字斜体強調は筆者)

(この書籍の内容に非常に深く関わっているのが日本における言語の問題であります。日本で用いられる言語は、文体表現上は話し言葉と書き言葉が非常に異なっております。ただし、その構造においてはどちらもほとんど同じものであります。)

ここで森は、日本における言語も「話し言葉」と「書き言葉」の内部構造 (structure) は基本的に大きな変化はなく、言文不一致なのは文体表現 (the style of expression) に原因があるといっている。つまり、これは言語改革を必要としているのは「我々 (日本) の言語」の「内部構造

= 文法」ではなく、文体表現を支配している「表意文字」の漢字・漢語（「彼ら（中国）の言語」）であるといっているのである。実際、森にとっては「歴史的に耐久性のある」¹⁸⁾ 日本語の母体（integrity）としての内部構造を保持するためにも、話し言葉（= やまと言葉）と書き言葉（= 漢語）の統一（言文一致）を行なうことが緊急課題になっていた。そのためにホイットニーへの書翰においてまず「土着語である話し言葉のローマ字化」と新しい〈語彙〉を英語から合理的に採用するための「簡易英語」を考案したのであった。しかし馬場はこの点を理解することが全くできていなかったのである。

馬場の議論の展開をさらに注意深く追っていくと、奇妙にもその内容が森がホイットニーへの書翰の中で述べている議論と同じロジックにますます重なり合っていくことに気づかされる。馬場が英語も日本語と同様に欠点がある（defective）と批判を展開していく点がそうである。そこで非常に驚かされるのは、その批判の対象がなんと英語の「正書法（orthography）」と活用形に基づいた「発音（pronunciation）」の不規則性に向けられていることである。これは森が英語を批判した時の問題提起とまったく同じではないか。馬場は次のように語っている――

"We admit that in several respects the English is far superior to the Japanese, but at the same time, we think in many respects the latter excels the former. For instance, generally speaking, English has the advantage of brevity of expression. . . . **On the other hand, we have a regular orthography and more uniform pronunciations in the Japanese, while it is generally admitted that the English language in both these respects is very defective.** Thus, after a careful examination, it will be found that there are perfections and imperfections in both languages."¹⁹⁾ (太字斜体強調は筆者)

（たしかにある点においては英語は日本語よりも優れているといえるでしょう。しかし同時に、多くの点において日本語が英語に勝っている点もあると思います。例えば、一般的に英語は簡潔な表現ができる点で優れているところもありますが、……その一方で日本語は正書法と発音の規則的な体系をもっております。この点においては英語のほうが日本語よりも不規則で

あるといえると思います。)

馬場はこのように「正書法」と「発音」の不規則性に関していうならば、むしろ日本語のほうが英語よりも整っており、英語はその点に関する問題を非常に多く抱え込んでいる、というように英語を「相対化」し、日本語と英語の間に構造上で「絶対的」な優劣の差はないことを指摘している。これは森が(日本語の「言文一致」に関わる)「正書法」と「発音」問題は日本の言語だけではなく、英語の問題でもありとし、その解決策として「簡易英語」を提案した時の議論の発想とほぼ同じものであるといつてよい。

さらに馬場はインドなどにみられる英語による「社会階層の二極化(教養層と一般層への分裂)」問題についても言及している。イ・ヨンスクが指摘するように、確かに馬場はこうした「社会の中の言語 (language in society)」²⁰⁾の「相対性」を示している点で社会言語学的先見性を示しているといえよう²¹⁾。しかし、これはホイットニーが森への書翰の中ですでに論じていたことでもあるのだ²²⁾。馬場がその「視点と論点」をホイットニーの書翰から学んでいることを考えればその「先見性」も必ずしも馬場にのみ帰せられるべきものでもないことが分かる。なぜなら、それはまさに森自身が「簡易英語」論を引き出した時に使っていた論拠とまったく同じロジックでもあるからだ。

我々は森自身が「ホイットニーへの書翰」の中で「言語の相対性」と「社会階層の二極化」問題についての考察をもすでに行なっていた点に気づくべきである。まず「言語の相対性」についてであるが、森はまさに馬場と同様に、言語の内部構造を「絶対化」ではなく「相対化」してみる批判の目があったからこそ「日本語」も英語も言文一致と正書法の観点からみれば同様の問題を抱えている」という視点をもつことができたと考えなければならない。こうした「相対主義」的視点をもっていたからこそ森は、“不規則性に満ちた”本来の「英語」をそのまま採り入れるのではなく、その欠点になっていた「正書法」と活用形態に基づく「発音」の不規則性の問題を合理的に解決した「簡易英語」でなければならない、と言い得たのである。これは「日本語の言文一致」問題と連なる「英語の言文一致」に関しての提言である。この点について田中克彦は「森は日本語への裏切り者のように言及されがちであるが、冷静

に見ておかねばならないのは、英語をうのみにするのではなく、これを改良することを条件としていたのである。エスペラントが発表されるに15年も先立って、このような考えが当の英語国民以外から出されたということ、私は森の当時における国際感覚の先進性として示したいのである」と述べている²³⁾。田中のこの分析はまさに正鵠を射ており、森の「英語採用論」の独創性(=森の「脱西洋化」思想)と「先見性」に触れた正当な評価であるといえる。

この田中の解釈にしたがえば、森が「社会階層の二極化」問題についても同じような立場をもっていたものと考えることができる。森は、「不規則体系をもつ英語」によって「教養層」と「無教養層」へと「二極化」する問題は「非英語国民」だけでなく、「英語国民」の問題でもある²⁴⁾と喝破している。これは「言文不一致」な「英語」の不規則性まで正確に身につけることができるだけの十分な「学習」時間を「持つ者」と「持たざる者」の社会階級の問題に深く関わっているものと森自身が考えていたことを示唆している。だからこそ不規則性を取り除いた「簡易英語」であれば、それは「英語国民」にとどまらず「非英語国民」の言語学習と「社会階層の問題」の解決にも少なからず貢献し得るとまで述べているのである。またそうした考えをもっていたからこそ、「簡易英語」でなければ日本国民の「時間の浪費」に繋がるので「採用」はできない、と森は明言しているのである²⁵⁾。

しかし馬場の森批判の矛先はこの「時間の浪費」と「社会階層の二極化」問題にまで及んでいる。それは「英語採用=日本語廃止」によって国民は(系統の全く異なる)「新しい言葉」の学習のために膨大な「時間が浪費」され、その結果、「社会階層が二極化」するという批判である。馬場は次のように語っている――

“The English language, which is one of the most difficult of modern languages, and entirely different from our own, will require a very long time to be mastered by so many people, so that much precious time will be thrown away. It is quite a different case from that which Mr. Mori and others propose to do in Japan. . . . This will be seen amongst the Welsh, Irish, and Scotch, who, in fact, are learning two languages at present, and throwing away

(英語は現代語においても最も習得が難しい言語の一つであり、日本の言語とは系統が全く別のものであり、したがって多くの日本人学習者がその習得に多くの時間をかけなくてはならなくなります。その結果、人生の多くの時間がそれに費やされることになります。これは森やその他の知識人が主張しているようにそう簡単にいく話では全くないのです。そうした事例はウェールズ人やアイルランド人、そしてスコットランド人などを見れば分かることで、彼らは現在も英語と母国語の二言語を学んでいます。そしてそれに多くの時間を費やすことを強いられています。)

ここで馬場は「言語系統(または体系)が大きく異なる言語である (and entirely different from our own)」ために、非英語国民である日本人にとっては時間が膨大にかかる、と結論づけている(この「時間の浪費」問題もホイットニーが指摘した議論²⁷⁾の焼き直しになっている)。この議論の大前提にあるのは「英語の文法体系」と「日本語の文法体系」の「入れ替え」までをして、日本人が英語だけによって教育を施すようになるには「時間の浪費」があまりにも大きすぎるというロジックである。しかし、森は「将来日本の教育はすべて英語でおこなうようにしたい」ということはどこをどう読んでも一言もいっていないのである。仮にもしそう考えていたとしたならば、なぜ森はホイットニーへの書翰の最後に「簡易英語でなければ日本への導入はできない。もし簡易英語を日本の学校にも導入した場合は、子供たちには6~7年くらいの間はそれを勉強してもらうことになる」²⁸⁾といったのであろうか？ その目的は(前稿でも72頁で論じたように)どうみても英語を「日本の教育」における一種の「補助言語(外国語)」として学ばせ、西洋文明の〈語彙〉の習得を「日本語」の中へも容易に導入することを「目的」にしていたと考えるのが最も自然である。森の「望ましい言語改革」とは「土着の日本語」の内部構造(文法体系)を母体として「保存」した上での「ローマ字」と「簡易英語」の採用にあった。それらはいくまでも「新しい日本語(皇国言語)」の創出という究極の「目的」達成のための「手段」であった。森自身は言語体系(内部構造)まで英語に「入れ替える」などとは考えていなかったのにもかかわらず、馬場は森は「日本語を英語で

入れ替えようとしている」と考えているのである。したがって馬場には森がなぜ英語を「簡易」化する必要があると言いつたのか、その理由についてはまったく理解できなかったはずである（事実、その点についての言及は全くおこなわれていない）。馬場が「時間の浪費」の最大の理由にしているものは、「日本語文法体系」に代わる「新しい（英語の）文法体系」の獲得の難しさである。それに対し、森は「補助言語（外国語）」としての英語から〈語彙〉を増強する際に最も障害（＝「時間の浪費」）になるものはその「正書法」の不規則性にあると考えた。ここに馬場と森の議論のすれ違いを見てとることができる。

このように「時間の浪費」問題に関して馬場は「誤解」に基づいた大前提の上に立って森を批判していくのである。そしてその理由は、やはり馬場がホイットニーの「推定」解釈をそのまま「事実」として論じていることにある。それは「社会階層の二極化」問題に関しても同様である。馬場は続けて次のように云う――

“Naturally the wealthier classes of people can be free from the daily occupation to which the poorer classes are constantly subjected, and consequently the former can devote more time for learning the language than the latter. **If affairs of state, and all affairs of social intercourse are to be transacted through the English language,** the lower classes will be shut out from the important questions which concerns the whole nation. . . ; the consequence being that there will be an entire separation between the higher class and the lower, and no common sympathies between them. . . . These evils appear to be felt in India . . . a deep gulf there separates the higher and educated from the lower portion of society;”²⁹⁾ (太字斜体強調は筆者)

（当然、富裕層の人々は日常の雑事から解放されることになり、貧困層はそれに常に縛られることになる。その結果、前者は後者よりも、より多くの時間を言語学習に費やすことができるのである。もし、国事や社会活動のすべてが英語によってなされるようなことになれば、下層階級の人たちは国の重要な問題に関する議論から締め出されることになるであろう。（中略）その行き着くところは上層階級と下層階級への社会の二極化であり、

彼らの間からは心の交流は消え去ることになる。こうした弊害はインドに見られる社会問題である。(中略)〔インドでは〕大きな社会的溝によって上層階級・教養層と下層階級が分裂しているのである。

この「社会階層の二極化」の「視点と論点」もまたホイットニーが森への書翰の中で指摘していたものである³⁰⁾。したがって、ここでも「時間の浪費」問題と同じように馬場はホイットニーの議論をそのまま踏襲していることになる。しかし、これもすべて馬場が「ホイットニーから森宛の書翰」を下敷きにして森への「批判」を行なっていたと考えればすべて説明がつく。そう捉えれば、森が「ホイットニーへの書翰」の中で論じた「簡易英語」そのものが「社会階層の二極化」防止をも考慮に入れて考案されたものであり、「時間の浪費」問題に関しては「明示的」に言及していた³¹⁾ことを馬場が全く理解できなかったことは当然であったと了解できる。逆を言えば、もし馬場が「森のホイットニーへの書翰」の原文にすべて目を通すことができていたなら、彼の反論の内容もだいたい違ったものになっていたはずである。

しかし、実際には馬場は森の「望ましい言語改革」の方法論(ローマ字化+「簡易英語」)については知ることができなかったために、森が『序文』において「日本語を貧弱である」といった時、それは「内部構造=〈文法〉」の「不備」についてではなく、〈語彙〉の「不足」のことを意味していたことにも気づくことができなかったのである(これが馬場自らの議論とほとんど同じものになっているのにもかわらずである)。森の提案は、「言文不一致」問題と、日本における「漢語」による「社会階層の二極化」問題³²⁾の解決を同時に射程に入れた言語改革案であったのである。馬場が『日本語文典』の議論の最後で行き着いた結論は「我々は、むしろすでに存在する我々の言葉の〈語彙〉を増やしていくことでそれを——書き言葉としても——完全なものにしていくべきなのである」というものである。これは、日本語の話し言葉に決定的に不足している〈語彙〉を「簡易英語」から採り入れようとした森の「望ましい言語」改革の「狙い」にほぼ完全に一致した主張となっている。

だが、その〈語彙〉増強の方法論についての二人の考えは異なっていた。森がその手段として日本語のローマ字化と「簡易英語」を利用したのに対し、馬場は日本語の〈語彙〉を増強させる手段は「説明的翻訳」

にあり、と考えた。馬場はそれについて次のように云う――

“In case we have to translate English, Roman, or any other laws into Japanese of course we shall find many words which cannot be answered in the Japanese language, this owing to the difference in customs and ideas; but we can retain them with explanations.” ³³⁾ (太字斜体強調は筆者)

(我々が英語、欧州言語、その他の言語から日本語にその文化のエッセンスを翻訳しなければならない場合、日本語では表現出来ない多くの言葉に突き当たる。しかし、それは習慣や文化的考え方の違いによるものであることから、その概念は説明を加えることでいくらかでも採り入れることができるのである。)

ここで我々は馬場が福沢諭吉の慶応義塾の門下生であったことを思い出す必要がある。福沢は私塾の門下生や卒業生に「日本語が翻訳によって進化していく」ことを説いていた³⁴⁾。だから、馬場自身「日本語」の「話し言葉」の可能性については福沢と同様に「翻訳」というアプローチをベースに〈文明〉のエッセンスを「日本語」内においても豊かにすることはいくらかでもできると考えたのであろう。

しかし、それには「漢字」の力を借りなければ合理的にできないことまで十分に考え抜いてはいなかった。馬場の師匠である福沢が漢字の「造語力」を最大限活用する「翻訳主義」³⁵⁾を実践していたにもかかわらず自らその点についてはあまり深く考えることができなかったようだ。とはいえ、馬場は自らが漢字から「追放され」ている³⁶⁾その事実を棚上げして、土着の日本語の内部構造(文法体系)の有効性と〈語彙〉強化の必要性を英語とローマ字によって論じていたわけで、その点では「ローマ字」と「漢字」と「(簡易)英語」をひっくるめて論じた森のほうの問題の「本質」をより深く考えることができたといえる。事実、森は日本の言語改革においては「英語の採用」よりも「まず先 (first)」³⁷⁾に、漢語(表意文字)こそが話し言葉と書き言葉の〈言文一致〉を妨げる最大の障害になっていると考え、それ故に漢字を「ローマ字(表意文字)の採用」によって完全に追放することが急務であると訴えていたか

らである。これは馬場を苦しめていた漢語の問題そのものを解決するための策でもあった。「簡易英語採用」による日本の土着語の〈語彙〉の強化はその上での方策であった。

しかし、イ・ヨンスクの指摘にもあるように、馬場は『文典』の中ではあくまでも森の「日本語」論に対して反論しているものであり、肝心の日本語の「ローマ字化」問題や「簡易英語」論については一言も触れていないのである³⁸⁾。繰り返すが、馬場が、森からホイットニーへの書翰で書かれた「簡易英語」論の「真の狙い」がどこに定められていたのかを知ることができずに拙速に反論を開始してしまっている。馬場が確実に自らの議論の根拠としている資料は、『序文』に書かれた森の文章と同書に掲載されたホイットニーから森へ宛てた書翰だけである。彼は、森がまずどのような角度から「日本語」論を論じ、そしてそれに関わる「簡易英語」論へと展開していったのか考えることが十分にできなかったのである。だからこそ、馬場が反論を試みた議論も、結局の所、森がすでに考え抜いていた議論やホイットニーの提言をそのままなぞっているに過ぎないものになってしまったのである。馬場は森のように「本質論（「表意文字（漢字）と言文一致の問題）」から「日本の言語」の問題を考え抜いておらず、ホイットニーの「推定」解釈に引きずられるままに、憤慨し夢中で書いたのが『文典』だったといえる。その証拠に馬場は自らの議論の締めくくりにはやはり彼の「情報源」であるホイットニーの言葉を引用し、自らの主張（「土着語の重要性」）に代えているのである。馬場はホイットニーの書翰の中から「土着語」による教育の重要性の部分引用し³⁹⁾、森のように「日本語を放棄し、英語で代用」するのではなく、ホイットニーがいうように「母（国）語」を〈語彙〉の面から「強化」しそれを保持し、国民教育はそれによって行なわれるべきであると述べている。しかしこうしたロジックで森批判を行っていた馬場は「釈迦に説法」をしているようなものであった。森の最終的な言語戦略（「脱亜・入欧・超欧」⇒言語の独立）とは、新しく創出した「皇国言語」（それは「従来の日本語」そのものでも「従来の英語」そのものでもない日本の「新しい言語」）によって国民教育することにあつたのである⁴⁰⁾（森は「母国語」を軽視するどころかその可能性に賭けていたのであるというのが本稿における筆者の解釈である）。ただし、そのためには表意文字（漢字）に支配された「従来の日本語」が「進化」することがどうしても必要で

あると考えていたのである。そしてその第一歩として“国字改革”がどうしても必要になったわけである。そしてもしその改革が成功しなければ「日本語」の将来は危ういであろう、というのが森のロジックであった。しかし馬場がこの肝心な点を読み切れなかった。そしてそれは、馬場が森の「日本語」観に対するホイットニーの「推定」解釈（「英語採用論＝日本語廃止論」）を“事実”として「断定」することから自らの議論を始めていることが何よりの証拠である。

森が母国の言語である「従来の日本語」を「廃止」したいと考えていたという「噂」に対し、愛国心から馬場は即座に反論したことは事実であろう。しかし「愛国心」という点においても、その発想のスコープから見ても、最終的には日本から亡命し米国へ移住した馬場よりもむしろ日本という地に足をしっかりついて言語問題を考えた森のほうがより現実的でスケールも大きかったといえるだろう⁴¹⁾。なぜなら、森は馬場のように「日本語」論のみではなく、同時に「英語」論までも論じていたからである。それは世界を席卷しつつあった英語のヘゲモニーとの係わりの中で、“国民言語と国民教育の未来”を真剣に考え抜いていたからこそ「伝統的な“国字（漢字）”を「廃止」し、「ローマ字採用」を提案することができたといつてよい。森は「（ローマ字化された）新しい日本語」と「（簡易化された）新しい英語」を「折衷」アプローチによって紡いでいくことで「新しい日本語（皇国言語）」を創出するところまで考えていたのである。しかし、森が「我々の言語（＝vernacular）」の未来はどうあるべきかについて考え、それによって「文明化」のための国民教育を「新しい日本語＝新しい母国語」によっていかに合理的に実現させるかについて抱いていたイメージを、『文典』で森批判を行なった馬場は結局のところ理解することができなかったのである。

以上の議論によって、我々は馬場が森の「望ましい言語改革」を読み違え、その過程でいかにしてホイットニーの「推定」解釈が「固定化」されていったかを理解することができた。

この馬場によって生み出された「英語採用＝日本語廃止」論と「事実」化された言説は、その後も引き続き再生産され続けついに「常識」⁴²⁾とまでになっていくのである。そしてこのホイットニーから馬場経由で誕生した「定説」は多くの国語学者へと引き継がれ、それはさら

に森研究者や国語・英語教育関係者たちへと150年たった現在に至るまで引き継がれてきているのである。

最後に、現在に至るまでにこの馬場の言説がどのような「経路」を辿ってきたかについて概観し、そこに含まれるいくつかの大きな問題点について考察してみたい。

Ⅲ. 現代までの馬場「言説」の「再生産」構造と“政治的無意識”

これまでに見てきたように、森の「英語対日本語」言説はホイットニーから馬場へ經由することによってその「内実」に大きな変化が生じていた。そしてこの変容した言説は現在にまで引き継がれている。馬場以降のその「定説」の固定化のルートをつぶさに調べてみると、まずそこに現れてくるのは多くの国語学者たちであり、それに続いて確認されるのが森・馬場研究者や国語・英語教育(史)の専門家たちである。以下にその代表的な言説をいくつか挙げてみる。

まず、著名な国語学者たちがその「定説」を踏襲していたことは、すでにイ・ヨンスクが指摘している通りである¹⁾。イは山田孝雄、時枝誠記、保科孝一、平井昌夫、大野晋という5人の“大物”国語学者の言説を取り上げ、それぞれが馬場の言説(「英語採用=日本語(=国語)廃止論」)を根拠にしていることを示している。イの引用部分の中でも我々が特に注目すべきポイントをここでもう一度フォーカスし、それらをその他の知識人たちの代表的な言説と「接続」し現代まで辿ってみると次のようになる。

「〔森〕氏は日本語を廢して英語にしようと企圖せられ……森氏はこの日本語廢止説を主張」(高橋龍雄(「国語学者」), 1934)²⁾

「國語を全廢して英語を以って國語としようと考えて意見を發表」(山田孝雄(「国語学者」), 1935)³⁾

「英語によって教育するほうが得策でなからうかとゆう意見を抱かれた」(保科孝一(「国語学者」), 1936)⁴⁾

「國語を廢止して歐米のそれを採用することをもって理想とした。森有禮の國語廢止論はあまりにも有名」(時枝誠記(「国語学者」), 1940)⁵⁾

「私は60年前、森有禮が英語を國語に採用しようとしたことを此戰爭中、

度々想起した」(志賀直哉(小説家), 1946年)⁶⁾

「その西洋崇拜のあまり西洋語をもって国語に代えようとする国語改革論」(平井昌夫(「国語学者」), 1948)⁷⁾

「それ故、思い切って、英語を国語として、あるいは、国民教育の手段として、採用すべきである、というのであった」(萩原延壽(「馬場辰猪」研究者), 1967)⁸⁾

「これは森のもっていた危機意識の深さと日本民族が歴史的に背負わされている種々の制約についてのきびしい評価から出たもので、それが森をして、日本語の廃止をさえ唱道させることになったのである」(林竹二(「森有禮」研究者), 1967)⁹⁾

「日本語がいかなる目的にも役に立たない言語である、という結論に達してしまっている……森の意見は、日本語の幅はごく限られたものであるが、それすらも放棄しようとしているのである」(Ivan Hall(「森有禮」研究者), 1972)¹⁰⁾

「森有礼の英語国語採用論は……この英語採用論は、欧化思想の悪例として、日本人には評判がきわめてよくない」(高梨健吉, 大村喜吉(「英語教育史」研究者), 1975年)¹¹⁾

「漢文のかわりに英語をもって日本語とする説」(大野晋(「国語学者」), 1983)¹²⁾

「日本語蔑視の思想である……森有礼の日本語廃止案に極端な形で見られる」(渡部昇一(「英語学者」), 1983)¹³⁾

「森はニューヨークで『Education in Japan』(『日本の教育』)を刊行し、その序文でおおやけに日本語廃止論、英語国語化論を展開している」(渡辺武達(「英語学者」), 1983)¹⁴⁾

「日本語を廃止し、英語を採用しろ、と有名な「日本語廃止論」を提起している」(犬塚孝明(「森有禮」研究者), 1986)¹⁵⁾

「森の英語国語論は暴論である。自らの母語を他言語に切り替えるなどということがあっていいはずがない」(船橋洋一(「ジャーナリスト」), 2000)¹⁶⁾

「明治維新直後、後の文部卿となった森有礼は、日本語の言語を日本語から英語に変えたいと考え……」(若林俊輔(「英語教育史」研究者), 2000)¹⁷⁾

とりあえずここで取り上げたこの言説が「再生産」されてきた「ルー

トと時期」を整理すると次のような大きな「動き」が「見えて」くる。まず、それは戦前という日本の「国語」が最も強く「政治性」を帯びた時期（1930年代）に、主に国語学者たちによって集中的に「再生産」され、そしてその流れは戦後日本が高度経済成長を始めた「経済大国」の道を歩み始めた1970～80年代にかけて再び「登場」し、馬場・森研究者などがさらにそれを踏襲し¹⁸⁾、そしてそれはまたさらにマスコミ関係者である船橋洋一によって「英語公用語化」論が提案される2000年にまで連なっている。船橋の提案は現在でも多くの国語・英語研究者たちの間に少なからず議論を巻き起こしている。このように、馬場が生み出した「定説」は、「英語」に対抗する「国語」学者たちの手によって1930年代から敗戦にかけて「固定化」され、その大きな影響のもと、戦後は彼らの「言説」が多くの研究者によって「惰性的に（再検証なしに無批判的に）」引き継がれていったということになっているのである。

これら国語学者の「解釈」をはじめそれを継承してきた森・馬場研究者、英語〔教育（史）〕研究関係者の言説すべてに共通していることは、森の言説が「英語採用＝日本語（または国語）廃止」という認識によって成立している点である。ここに提起されている大きな問題は、「英語」という世界の「大言語」と「日本語（または国語）」の問題（＝「日本語 対 英語」論）を考える際に、「英語」でいくか「日本語」でいくかという極端な二項対立式の立論形式をとっていることにある。そしてその極端な「解釈」の原型の〈設定〉に“大きな貢献”を果したのが馬場辰猪であった。

しかし、馬場以降の多くの研究者たちが、ホイットニーの「推定」解釈、馬場の「解釈」、そしてその他のマスコミ報道によって作り出された「森の言語思想」の「定説」を「真」として受け入れてしまい、森の「日本語 対 英語」論を「暴論」¹⁹⁾として片づけてきてしまっていることは大きな問題があるといわざるをえない。ある議論が「暴論」であるためにはその議論の論拠が〈荒唐無稽〉なものでなければならない。しかし当時の国際言語政治力を鑑みれば、森が抱いていた言語思想は決して「了解不可能」なものではなかった。それは国際政治の舞台で外交官として活躍した一人のリアリストが、「日本の教育」改革における可能性を一つ一つ熟慮し、何が可能で何が不可能であるかをしっかり見据えて企てた言語戦略であったのだ。したがってそれが「暴論」であるとい

う「定説」は改められなければならないのである。

確かに森の発想があまりにも独創的であり、時代の先端を行き過ぎていたことに加え、森自身の説明不足が原因となり、多くの人たちから理解されることが難しかったことは事実である。しかしその後の森研究が進み、当時では手に入らなかった多くの資料を調べれば森の「日本語対 英語」論が「暴論」であるということもはや言えないはずである。

「森の言語思想の考察」以前の問題として、そうした「定説」がマスコミによって捏造された可能性が濃厚であろうくらいのことは、当時の国際政治状況と日本の言語思想史の文脈に沿って、原文を位置づけ、さらに当時の森関係者の証言を調べればおおよそのことは明らかにすることが出来たはずである。しかしそうした再検証はこれまでにほとんど行なわれてきていないのである。

森自身（——当時森は米国の少弁務使であった——）そうした「誤報（英語採用＝国語廃止論）」が故国日本においてもすでに流れていたことくらいは当然耳にしていたはずであろう。しかし森はそうした「誤解」に対しては一貫して「黙殺」する姿勢をとるべきであるものと考えていた。その点については森の側近（文部大臣時の秘書官）であった木場貞長氏ははっきりと断言している。「国教を耶蘇教にする」という「誤報」と同じマスコミにより捏造されていたことを、木場から「文相〔森〕が〔耶蘇教を〕国教に定むる意志ありということは、誤聞なることを明らかにし、新聞の取り消しを求める方がよろしい」と助言された森は「いまの世の中に、いまさら国教をつくるなどという考えは毫ももっていない……〔そんな誤報などは〕打ち捨てて置きたまえ、大臣の言動となれば種々の誤報も伝えられるものなり、一々これを取り消しては日もまた足らず、もし取り消しをはじむれば、取り消さない分は、それを認めたこととなりますよ」²⁰。

この発言は「耶蘇教の国教化」という「誤報」に対しての森の発言であるが、それを「英語の国語化」に入れ替えても森は同様の反応を示していたと考えるのが自然である。実際にそれはマスコミが捏造した嘘であったことをも木場は次のようにはっきりと証言している。

「〔森大臣は〕斯くの如く自分の信ずる所に向かつて邁進し、世の毀譽褒貶を顧みず主張されたのでありますから、各方面から誤解を受

け、随分間違つたデマを飛ばされたのであります。例へば、森さんは日本人に英語を用ひしむべしと云ふ説を持つて居られるとか、歐化主義者であるとか、或は又森さんは基督教信者であると云ふやうなことが傳へられ、種々雑多なことを傳へて攻撃されたのであります。併しながら若し能く先生を知るときは皆是れ誤解に出るものにして、先生のやつたこと、何れも愛國心の發露ならざるはないのであります。さうして此の憂國の信念は、先生の死ぬ迄極めて根強く持つて居られた所であります。』²¹⁾ (下線強調は筆者)

「森さんを文部大臣の位地から逐ふことを急務なりとする策謀があつたことは疑いなき事實であります。其の方面の新聞等は、其の時のことは勿論、其の他のことに就ても有ること無いこと悪宣傳をして居たのであります。例へば、森さんが神宮に參拜し泥靴の儘昇殿したとか、ステッキを以て神前の御帳を掲げて内部を覗いたと云ふやうなことも傳へられて居たといふ事である。又森さんは泥酔して參拜し、不敬の行動を取てせられたと云ふやうなことも記載してあつたといふ事である。其他色々事實を歪曲し、或は無根のことまで捏造して傳へたのであります。』²²⁾ (下線強調は筆者)

「要するにさう云ふ譯でありましたので、或る方面の新聞で森さんのこと、云ふと、有ること無いこと捏造したり誇張したり、古いことなど持ち出して攻撃日も亦足らず書立てたものであります。さうして結局も森さんを文部大臣の位地に置いては、神道のために國家のために不利益であるから速かに排除せねばならぬと云ふ運動が激しくなつて、遂に藥が利き過ぎた結果、西野の非行〔森暗殺〕となつたのであると思ふのです。』²³⁾ (下線強調は筆者)

これらの木場の証言から、事實に反し森がマスコミによって「耶蘇教者」としてレッテルを貼られ、神道関係者たちからの凄まじい攻撃にあった時とまったく同じ論理で「耶蘇教徒の森が国語を廃止して英語を採用するらしい」という「デマ」がマスコミによって捏造されていたことが分かる。その結果、神道と深い関係にある「国語」学者たちからも森は「国語廃止論者」というレッテルを貼られることになっていったこと

が理解できるのである。これは、1930年代になっても「国語」学者たちがそのレッテルを引き続き「再生産」していた歴史的理由でもある。

ここで非常に興味深いのは、森は「国家主義者」である神道関係者たちからマスコミを使って「欧化主義者」というレッテルを貼られ、そのうえに「耶蘇教国教化」「英語国語化」論者として激しく攻撃されていることである。森は上の証言にもあるように「耶蘇教」も「神道」も同様に「国教」とするべきだとは考えていなかった。事実、森は「神道」と同様に耶蘇教に対しても「相対的」、「折衷的」、かつ「批判的」な態度をもっていたのである²⁴。同様に森は神道の伝統とも関係の深い「日本の言語」と同様にキリスト教の言語でもある「英語」（の不規則性）に対しても同じように批判的な目を崩すことはなかったのである。しかし、西洋の「宗教」や「言語」の「絶対性」に対し、「非折衷的」な「絶対性」をもって対峙しようとした神道関係者や国語学者たちには、そうした森のすべての宗教や言語に対する「相対的折衷思想」は理解しがたいものであったのである。彼らはそれをマスコミと手を組み「欧米主義者」の「裏切り」として切り捨てていたのである。

しかし、ここで筆者が問題にしたいのは、「定説」を完全に否定する木場のような（信憑性の高い）証言があるにもかかわらず、大正、昭和（戦前戦中戦後）そして平成に至るまでなぜこの森の言語政策に関する「定説」が十分に再検証されてこなかったか、ということである。森の言語戦略を一方向的に「暴論」と決め、それを「野放し」にしてきたことは、日本人の国語・英語研究者たちの「言語態度」と「言語の政治性（the politics of language）」に対する認識そのものについて何かを語ってはいないだろうか？ 先に見たように森有禮という人物は、言語関係の研究者の間では現在にいたるまで、ことある度に繰り返し、繰り返し「明治初期の“欧化主義者”で「英語採用＝国語廃止」論者」としてのみ取り上げられている。しかし、森のその言説が提出されてから130年もの間、本来「論外」であったはずの彼の「定説」がなぜそうして何度も何度も取り上げられているのか？ それはただの興味本位で取り上げられたものなのであろうか？ またこれまで「否、実は必ずしもそうではなかった」という見解がほとんど出てこなかったという事実そのものが日本人言語研究者たちの「国語」と「英語」に対する言語観について何かを物語ってはいないだろうか？

筆者はこうした現象は「偶然」生じているのではなく、日本の言語問題を研究するものたちの「国語」「英語」の両言語に絡む「文化の政治性 (the cultural politics)」に対する言語認識²⁵⁾の欠如によって生み出されている「必然的」結果であると考え。それは日本が近代化を果し、国民国家として独立していく中で、森有禮が「体感」していた国際言語政治力学に対する「政治的意識 (the political awareness)」が現在の多くの言語研究者たちには欠けていることから生じている現象である。「英語」と「国語」の双方の問題に関して「政治的無意識 (the political unconscious)」のままだったのでは日本におけるいわゆる「言語帝国主義」論争の「本質」²⁶⁾はいつまでたっても「見えてくる」はずがなく、そうなれば当然森の「独創的」な言語思想を正確に読み解くことなどはや不可能であるといえよう（——そこでは「英語」論と「日本語」論との2つの研究ベクトルが必要であることは前稿の「序章」で論じた通りである）。日本においても少なくとも戦前までは言語に対する「政治性」を（森と同様に）「脱亜・入欧・超欧」の文脈の中で「問題化 (problematizing)」する知識人は少なくなかった²⁷⁾。しかし、どうやらそうした言語思想は戦後は敗戦と共に「解体」され「闇に葬られた」ようである。

前稿においても詳しく論じたように、森の言語思想は「脱亜・入欧・超欧」という3つの位相から考案されていた点において非常に斬新的であり、それは彼がいかにか時代の最先端において日本の言語「戦略」をグローバル・レベルで構想していたかを物語っている。

しかし、現代の多くの国語学者や英語関係者たちは森の「日本語か英語か」「欧化主義者か国家主義者か」という二項対立的な見方で森の言説を読み解こうとした結果、森の「望ましい言語改革」の「手段」を「目的」と読み違えることになったのである²⁸⁾。そうしたホイットニーや馬場によって「定説」化された「解釈の枠組み」が原因となり、多くの研究者たちは森の言語思想の真骨頂である「① 脱亜 (漢字)・入欧 (英語) ⇒ ② 超欧 (皇国言語)」という弁証法的で重層的な構想が「見えない」のである。彼の言語戦略は、① 「土着の日本語 (話し言葉) を「英米帝国」²⁹⁾の文字 (ローマ字) によって表記する (文字の「入欧」) ことで「中華帝国」の文字 (漢字) からの「脱亜」を企て、日本語と英語との共通「折衷」媒介項 (アルファベット) を設定したところで、② 改良を施した「簡易英語」を導入し、英語から経済的かつ合理的に³⁰⁾ 西

洋文明の新しい語彙や概念を「日本の言語」にも「取り込んで」いくことで「入欧」を果すことで、「大日本帝国言語（皇国言語）」を仕立て上げ、これによって西洋の帝国言語からの「超欧」までも試みていたものであった。しかし、こうした森の言語問題への取り組み方に対する是非をなぜ現在の英語・日本語関係者たちはあまり論じようとしないのであろうか？ それが「未解決」であること自体が現在の日本人の「英語」「国語」に対する問題意識に依然として大きな影響を与えているにもかかわらずである。そしてこうした言語に対する「政治的無意識」がさらに現在の日本における「ネイティブ・スピーカー信仰」や言語による「人種差別」までも生み出すことになっているのである³¹⁾。

日本における言語と文化に関わる諸問題（「英語」や「国語」にたいする言語態度（reaction））は筆者の云うところの「帝国言語の三極構造（The Imperial Language Triangle）」³²⁾の中で、日本、日本人、「日本語／国語」が布置された特殊な「歴史——地政的配置」³³⁾が原因で歴史的に（必然的に）引き起こされているものと解釈することができる。近代の日本は「帝国の三極構造」の中で「人種、国家、民族」を規定することを要請されていた。そしてその新生日本の「身許証明」の“担保”となるべき装置が「国語」であったのである。「想像の共同体」のための創造された“民族”言語が「国語」として誕生したのである。中国語と西洋語（特に英米語）という「東西の大帝国の二極構造」の中に、新生日本帝国が「日本語」の「脱亜・入欧・超欧」の言語戦略（「国語（皇国言語）創出」）をもって参画し、その中で「日本の言語」が帝国言語として「独立」していくことであらたに成立した地政学上の言語力学の‘場（site）’が「帝国言語の三極構造（中国／漢語、日本／国語、米／英語）」である。現在の「日本の言語」と「言語態度」も依然としてこの地政学的な大言語の三極構造の中において成立しており、一度は帝国化した「国語」は現在も国際化する「日本語」というもう一つの「顔」をもちながらこの「言語戦争」の中でその安定と維持を図っているのである。こうした現在の“日本人”の「言語態度」はこの「帝国言語の三極構造」の中で流動的に規定されている主体（subjectivity）とアイデンティティ（identity）の問題と深く関わっているものである。そしてこれまでの議論を踏まえていえば、こうした地政学上の言語問題に初めて本格的に取り組んだのが近代明治日本における初代文部大臣森有禮であったと結論

づけることができる。そしてまた現在の英語・国語学者、英語・日本語教師たちもその問題から無縁ではないのである。しかしそれにもかかわらず彼ら自身がこれまで無批判に（否、無関心によって）森の「日本語対 英語」言説を「定説（英語採用論＝日本語廃止論）」として「再生産」し続けてきたことはこの問題がいかに根深いものかを如実に物語っているといえる。今を生きる我々にとって森の言語観に学べるところがあるとするならばいったいそれはいかなる点にあるのか？ またその限界とはいったいどこにあるといえるのだろうか？ 次稿〔本稿の(3)〕においては、このような問題意識のもと、森がいかに「帝国言語の三極構造」の中で日本の「帝国言語」戦略を实践しようとして、自らどのような問題を抱え込むことになったか、そしてそれが現在の我々にとってもどのような意味をもっているのかについて論じていく予定である。

最後に、本稿で論じた「英語採用論＝日本語廃止論」の言説の「始まり」とその再生産と固定化の「経路」の流れを整理しておく。

- ① 森のホイットニーへの手紙（明治5年）（当時日本語には翻訳されず）³⁴⁾ →
- ② ホイットニーの森への返信（明治5年）「推定」解釈表現発生→
- ③ 『日本の教育』（明治6年）の「序文（“All reasons suggest its disuse” → 「誤読」される）」（当時の日本語翻訳の所在は不明で確認できず）³⁵⁾

この『日本の教育』にはホイットニーの森への返信が掲載される（しかし森のホイットニーへの書簡は未掲載）

ホイットニーの森への手紙が翻訳（明治7, 8年）される ³⁶⁾ が一般公開されず

- ④ 馬場（明治6年）『日本の教育』にてホイットニーの森への返信によって、森の言語政策の「内実」を知る。馬場反論『日本文典』序文を書く。②の「事実」化と③の「誤読」。〈当時はこの馬場の森批判は翻訳されず〉 →
- ⑤ 国語学者（時枝、保科など）らが④の馬場の「解釈」の踏襲・再生産→
- ⑥ 現代の馬場・森研究者や英語教育関係者へと「未検証」のまま

註

I. ホイットニーから森への書翰（明治5年5月24日）

- 1) 小林敏宏「森有禮の「脱亜・入欧・超欧」言語思想の諸相(1)森有禮の「日本語対英語」論再考」成城大学文芸学部紀要 成城文藝／第176号 2001年10月
- 2) 小林, 同論文, 65-66頁
- 3) ホイットニーと森との往復書翰の日附の詳細については同論文（小林）の78-79頁を参照すること。
- 4) 新修『森有禮全集』第五卷, 文泉堂書店, 1998年, 335頁
- 5) このロジックがホイットニーの議論の足場になっていることは, 最後まで substitution というキーワードによって同様のロジックが繰り返し展開されていることから分かる。その言葉が使われている箇所を以下に挙げておく。

“in the way of carrying out a substitution of the European for the native mode of writing” (p.339)

“the substitution which you propose has to be carried out” (p.341)

“the substitution will take place by a more organic process” (p.341)

“the substitution of any other for it must at the best be the work of generations” (p.343)
- 6) 小林, 前掲論文, 62-68頁
- 7) 小林, 同論文, 103-106頁
- 8) 新修『森有禮全集』第二卷, 54頁
- 9) 同箇所
- 10) 新修『森有禮全集』第五卷, 334頁
- 11) 土田知則・神郡悦子・伊東直哉『現代文学理論』新曜社, 1998年, 171頁
「遅れてきたテキスト（子なるテキスト）は, 先行するテキスト（父なるテキスト）の財産（権）を一方的に譲渡されるのではなく, 「誤読（反読）」という営為を通じて, それを強力に侵害する。つまり, 「間テキスト」の理論とは, 「影響」の概念を無化し, テキスト間に想定されてきた位階性を可能な限りゼロ化しようとするものに他ならないのだ。」
- 12) 小林, 前掲論文, 62-78頁
- 13) 小林, 同論文, 52頁, 78頁
- 14) 新修『森有禮全集』第二卷, 54頁

森は英語国における一流の言語学者たちでさえも, 英語の不規則性を改革する「仕事」を「皆始めてはみるが臆病にもそれを放棄してきた (all commenced but timidly abandoned)」と非難し, それを日本人の森が引き受けて成功させてみよう, と述べている。これは非英語国民から英語国民

の「英語」に対して突きつけられた一種の「挑戦」とみてよいものである。

- 15) 新修『森有禮全集』第五卷, 337頁
- 16) 新修『森有禮全集』第二卷, 52頁
- 17) 新修『森有禮全集』第五卷, 340頁
- 18) 小林, 前掲論文, 69-78頁
- 19) 新修『森有禮全集』第五卷, 341頁
- 20) 小林, 前掲論文, 77-78頁, 126頁
- 21) 新修『森有禮全集』第五卷, 335頁

II. 馬場辰猪の森批判 (明治6年)

- 1) これは森がホイットニーへ宛てた書翰に綴った「簡易英語採用」論についての文章ではないことに注意。
- 2) 萩原延壽『馬場辰猪』中央公論社, 1967年, 38頁
- 3) 新修『森有禮全集』第二卷, 58頁
- 4) 新修『森有禮全集』第二卷
substitute the English language for it (58頁) / the substitution of the English for the Japanese language (63頁) / this proposed substitution (64頁) / discard it and substitute (66頁)
- 5) 新修『森有禮全集』第二卷, 63頁
- 6) 小林, 前掲論文, 98-107頁
- 7) 新修『森有禮全集』第二卷, 63-64頁
- 8) 馬場は 'to protest against a prevalent opinion entertained by many of our countrymen, as well as foreigners who take some interest in our country' といっている。この many of our countrymen は具体的には知識人だけでなく、当時の日本で巻き起こっていた「英語熱」に駆られていた一般の人々を指しており、こうした日本人の「英語熱」については彼がかつて門下生でもあった慶応義塾の仲間から聞いていたに違いない。当時明治5~6年は日本では空前の英語ブームが巻き起こっていたことについては太田雄三『日本人と英語』(講談社学術文庫, 1995年)に詳しい。また foreigners who take some interest in our country は森をホイットニーに紹介した Joseph Henry (この人物の書翰は『日本の教育』にも掲載されている)を筆頭にその他森の「英語採用論」に同調する日本に滞在する「お雇い外国人」たちのことであろう。
- 9) 森のホイットニーへ宛てた書翰は、翌年に出版された『日本の教育』の「序文」の中で述べられた言語問題に関する〈結論〉に至るまでに重要なプロセスになっていた。しかし馬場はこの私信を原文で正確に読む事はできなかった。しかしこの森から「簡易英語採用論」について助言を求めて書かれたホイットニー宛の私信は1873年に米紙 *Tribune* (日付は不明)に「編集」され掲載されることになった。しかしそこに掲載された森の「簡易英語採用論」の内容の取り上げ方(「編集」)が馬場の森への「誤解」を生み出す最大の原因になっていると思われる。この *Tribune* の原文は Ja-

pan Weekly Mail (1873年3月1日号)に転載されている。そしてそれはさらに『英語青年』(1934年10月1日号)にも掲載されている。

- 10) 『英語青年』(1934年10月3日号), 8頁
- 11) 新修『森有禮全集』第二卷, 53頁
- 12) 新修『森有禮全集』第二卷, 59頁
- 13) 小林, 前掲論文, 98-102頁
- 14) 新修『森有禮全集』第二卷, 61頁
- 15) 同書, 66頁
- 16) 小林, 前掲論文, 62-78頁
- 17) 新修『森有禮全集』第五卷, 185頁
- 18) 小林, 前掲論文, 74-75頁
- 19) 新修『森有禮全集』第二卷, 62頁
- 20) スザーン・ロメイン『社会の中の言語』三省堂, 1997年
- 21) イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店, 1996年, 16-17頁
- 22) 新修『森有禮全集』第五卷, 340-341頁
- 23) 田中克彦『国家語をこえて』筑摩書房, 1998年, 33頁
- 24) 新修『森有禮全集』第二卷

“In other word, I propose to banish from the English language, for the use of the Japanese nation, all or most of the exceptions, which render English so difficult of acquisition by English-speaking people, and which discourage most foreigners, who have the hardihood to attempt to master it, from persevering to success.” (53-53頁)

(つまり, 私が提案していることは, 日本国民のために英語から大方すべて例外的不規則表現を取り除いていくことであります。そうした不規則性は英語国民の英語学習の障害になっているだけでなく, 苦勞しながら英語を習得しようとしている外国人にとって, 人生において英語を十分に活用していくという気持ちを削ぐ原因ともなっています。)

“...not only English speaking people, but the world at large, would be greatly benefited by a thorough re-cast of English orthography” (56頁)
(徹底した正書法の改革によって英語国民だけでなく, 世界の多くの国民に大きな利益をもたらすはずです。)

- 25) 同書, 56-57頁; 小林, 前掲論文, 72頁, 125頁
- 26) 新修『森有禮全集』第二卷, 63-64頁
- 27) 新修『森有禮全集』第五卷, 340頁
- 28) 新修『森有禮全集』第二卷, 57頁
- 29) 同書, 64-65頁
- 30) 新修『森有禮全集』第五卷, 340-341頁
- 31) 新修『森有禮全集』第二卷, 56-57頁/小林, 前掲論文, 72頁
- 32) イ・ヨンスク, 前掲書, 22頁
- 33) 新修『森有禮全集』第二卷, 63頁

- 34) 福沢諭吉『学問のすすめ』講談社文庫, 1972年, 148頁

「あるいは書生が日本の言語は不便利にして、文章も演説もできぬゆえ、英語を使い英文を用うるなどと、取るに足らぬ馬鹿をいうものあり。按ずるに、この書生は日本に生まれて、いまだ十分に日本語を用いたることなき男ならん。国の言葉は、その国の書物の繁多なる割合にしたがって次第に増加し、毫も不自由なきはずのものなり。なにはさておき、いまの日本人は、いまの日本語を巧みに用いて弁舌の上達せんことを勉むべきなり。」

- 35) 丸山眞男・加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波新書, 1998年, 43-48頁
36) 注32)と同箇所
37) 新修『森有禮全集』第二巻, 52頁:小林, 前掲論文, 66-67頁
38) イ・ヨンスク, 前掲書, 14頁
39) 新修『森有禮全集』第二巻, 66頁
40) 小林, 前掲論文, 77-78頁, 126-127頁
41) 梅棹忠夫(『日本語と日本文明』, 123-124頁)は国語左派の愛国心の強さについて次のように述べている点は興味深い。

「伝統的である国字を廃して、かわりに外来のローマ字などをもってこようという。国語左派はしばしば、国際派であり、反国家主義的であるとさえ、うけとられる。しかし、これは完全な誤解である。国語左派の主張は、つねにつよい国家主義で色どられてきた。それは、一種の富国強兵政策でさえあった。……かれらは、右派よりももっと国家主義者である。かれらの国家主義は、いつも未来に身がまえている。」

馬場辰猪と森有禮の視点の向け方の違いについて萩原延壽(『馬場辰猪』中央公論社, 1967年, 42頁)は「森は国際的な利益を優先させて、馬場は国内的な影響を憂慮した」と述べている。たしかにそれはその通りでもあるのだが、正確を期していえば森が「英語採用論」を提案したのは、国内・国際の利益を共に考えていた結果であるというべきである。園田英弘は「森は国際的利益のみを優先させる国家本位の発想からではなく、諸々の進歩の根源である個人の文明化のために「英語採用論」を主張しているのである」(『西洋化の構造』思文閣出版, 1995年, 271頁)と述べているが、愛国心が外に向けてだけでなく、国内にも同時に及んでいたという観点からいえば、萩原の見方よりは園田の見解のほうがより正確であるといえよう。

- 42) 中村敬「船橋洋一, 志賀直哉そして森有禮——西洋の大言語と皇国言語の狭間で——」成城大学文学部紀要 成城文藝/第170号 2000年3月, 4頁

Ⅲ. 現代までの馬場「言説」の「再生産」構造と“政治的無意識”

- 1) イ・ヨンスク『「国語」という思想』p3-5
2) 高橋龍雄「国語国文から見た福沢先生」『史学』第13号第3号, 387頁, 1934年

- 3) 山田孝雄『国語学史要』岩波書店, 1935年, 298頁
- 4) 保科孝一『国語と日本精神』実業之日本社, 1936年, 11頁
- 5) 時枝誠記『国語学史』岩波書店, 1940年, 改版1966年, 157頁
- 6) 志賀直哉「国語問題」『改造』4月号, 1946年—『志賀直哉全集』第七卷(岩波書店)所収
- 7) 平井昌夫『国語国字問題の歴史』昭森社, 1948年, 173頁
- 8) 萩原延壽『馬場辰猪』中央公論社, 1967年, 38頁
- 9) 林竹二「森有礼研究第一 森駐米代理公使の辞任」『東北大学教育学部研究年報』15, 1967年, 17頁
- 10) 大久保利謙編『森有礼全集』第一卷, 宣文堂書店, 1972年, 解説94-95頁
- 11) 高梨健吉, 大村喜吉編『日本の英語教育史』大修館書店, 1975年, 196-198頁
- 12) 大野晋「国語改革の歴史(戦前)」, 丸谷才一編『日本語の世界16・国語改革を批判する』中央公論社, 1983年, 19頁
- 13) 渡部昇一『レトリックの時代』講談社学術文庫, 1983年, 238頁
- 14) 渡辺武達『ジャバリッシュのすすめ』朝日新聞社, 1983年, 66頁
- 15) 犬塚孝明『森有礼』吉川弘文館, 1986年, 158頁
- 16) 船橋洋一『あえて英語公用語論』文芸新書, 2000年, 196頁
- 17) 若林俊輔「[母語をつぶすつもりか]——「英語公用語化」論に一言」『英語青年』9月号, 2000年, 28頁
- 18) 現代の馬場辰猪研究者を始めとして森有礼研究の第一人者Ivan Hallにしても戦前の国語学者高橋龍雄(「国語国文から見た福沢先生」『史学』第13号第3号, 387頁, 昭和9年11月)の言説をそのまま「未検証」のまま踏襲している(『森有礼全集』(1972) 解題26頁)。
- 19) 森有礼研究者であっても, 森の「英語対日本語」論は「暴論」であると“断罪”してしまっている点は大変遺憾である。
「熱心の余りついに軌道を脱した矯激な議論」(大久保利謙『森有礼』文教書院, 1944年, 47-49頁)
「このあまりに無謀な議論に, この後多くの反駁があり, 内外識者の間で物議をかましたことは言うまでもない。」(犬塚孝明『森有礼』吉川弘文館, 1986年, 158頁)
- 20) 坂元盛秋『森有礼の思想』時事通信社, 1969年, 221-222頁
- 21) 新修『森有礼全集』第四卷, 585頁
- 22) 同書, 590頁
- 23) 同書, 593頁
- 24) 旧版『森有礼全集』第三卷, 解題12頁
- 25) 中村敬「船橋洋一, 志賀直哉そして森有礼——西洋の大言語と皇国言語の狭間で——」成城大学文芸学部紀要 成城文藝/第170号 2000年3月
この論文で中村は, 日本における「英語」と「国語」に絡む「言語/文化の政治性」を同時に取り上げ, その問題の「本質」は「大言語意識」

の陥穽」にあると論じている。

- 26) 糟谷啓介・三浦信孝編『言語帝国主義とは何か』藤原書店, 2000年
上の書は、日本を含む世界の「言語とその政治性」に絡む諸問題を多角的に論じ、啓蒙的な視点を数多く提供してくれる日本では数少ない論文集の1つである。しかし、どういうわけかその中では、最も肝心な日本における「言語帝国主義」のテーマの中心の1つでもある「「国語」と「英語」」問題が日本人研究者によって十分に論じられていない。そこでは「国語」問題に関する最も大きなテーマは韓国人のイ・ヨンスク氏が、そして「英語」問題についてはイギリス人のロバート・フィリップソン氏がそれぞれを担当しており、日本の「英語」問題を「国語」問題と共に関連づけながら論じている日本人が一人も入っていないのはこの書の最大の難点である。
- 27) 小林, 前掲論文, 45-52頁
28) 小林, 同論文, 124-127頁
29) アルファベットは「英米語」だけの文字ではないが、ここでは西洋の中の最強の帝国言語の文字という意味で用いている。
30) 小林, 前掲論文, 125頁 (⇒ 森の「経済主義=合理主義」について参照すること)。
31) 「国語」と「英語」の両言語に対する「政治的無意識」が、本質主義 (essentialism) に基づく「有色人種」の英語話者の「他者化 (人種差別)」と「白色人種」の英語話者への「同化 (崇拜志向)」を生み出す問題については、本稿の(3)において森の言語態度と絡めながら取り上げる予定。
32) 小林, 同論文, 44-52頁 (⇒ 近代日本 (の言語) の地政学的位置と「言語政治学」について参照すること。) — この「帝国言語の三極構造 (The Imperial Language Triangle)」という地政学的説明概念は本稿の(3)で、「森の英語に対する言語態度」に絡めながらさらに詳しく論述する予定。
33) 酒井直樹『死産される日本語・日本人 ——「日本」の歴史——地政的配置』新曜社, 1996年
34) 「森のホイットニー宛の書翰」の日本語訳は『英語青年』(1934) 10月3日号に初めて掲載されるまで日本語では一般公開されることはなかった。「II. 馬場の森批判」の注9)も参照すること。
35) 『明治文化全集』(日本評論社, 1968年, 解題 18-21頁)の海後宗臣による「日本教育策解題」によれば、森が計画していた日本における『日本の教育』の全体の邦訳は実現しなかったらしい。そしてこの『日本の教育』の中で翻訳されているものは、書翰の部の最後にあるガーフィールド氏の返信と、それに続くホイットニーの「日本に英語を通用するの論」(明治7~8年頃)及び「米国教育概略」だけのようである。
36) 上の注35)を参照すること。

引用文献

犬塚孝明『森有礼』吉川弘文館, 1986年

イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店, 1996年
梅棹忠夫『日本語と日本文明』くもん出版, 1988年
大井憲太郎『明治文学全集 12』筑摩書房, 1973年
大久保利謙『森有礼』文教書院, 1944年
大久保利謙編(旧版)『森有礼全集』第一巻, 第三巻, 宣文堂書店, 1972年
大久保利謙監修・上沼八郎・犬塚孝明編 新修『森有礼全集』第二巻, 第五巻,
文泉堂書店, 1998年
太田雄三『日本人と英語』講談社学術文庫, 1995年
大野晋『国語改革の歴史(戦前)』, 丸谷才一編『日本語の世界 16・国語改革を
批判する』中央公論社, 1983年
糟谷啓介・三浦信孝編『言語帝国主義とは何か』藤原書店, 2000年
酒井直樹『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史——地政的配置』新
曜社, 1996年
坂元盛秋『森有礼の思想』時事通信社, 1969年
志賀直哉『志賀直哉全集』第七巻, 岩波書店
スザーン・ロメイン『社会の中の言語』三省堂, 1997年
園田英弘『西洋化の構造』思文閣出版, 1995年
高梨健吉, 大村喜吉編『日本の英語教育史』大修館書店, 1975年
土田知則・神郡悦子・伊東直哉『現代文学理論』新曜社, 1998年
時枝誠記『国語学史』岩波書店, 1940年, 改版1966年
中村敬『英語とはどんな言語か——英語の社会的特性』三省堂, 1989年
萩原延壽『馬場辰猪』中央公論社, 1967年
平井昌夫『国語国字問題の歴史』昭森社, 1948年
福沢諭吉『学問のすすめ』講談社文庫, 1972年
船橋洋一『あえて英語公用語論』文芸新書, 2000年
保科孝一『国語と日本精神』実業之日本社, 1936年
丸山眞男・加藤周一『翻訳と日本の近代』岩波新書, 1998年
吉賀徹編『翻訳と日本文化』山川出版社
山田孝雄『国語学史要』岩波書店, 1935年
渡部昇一『レトリックの時代』講談社学術文庫, 1983年
渡辺武達『ジャバリッシュのすすめ』朝日新聞社, 1983年

小林敏宏「森有礼の「脱亜・入欧・超欧」言語思想の諸相(1)森有礼の「日本語
対 英語」論再考」成城大学文芸学部紀要 成城文藝／第176号
2001年10月

中村敬「船橋洋一, 志賀直哉そして森有礼——西洋の大言語と皇国言語の狭
間で——」成城大学文芸学部紀要 成城文藝／第170号 2000年3月
林竹二「森有礼研究第一 森駐米代理公使の辞任」『東北大学教育学部研究年
報 15』, 1967年

K. F 「森有礼の英語を国語とする論」『英語青年』72巻(8-9頁), 1934年
高橋龍雄「国語国文から見た福沢先生」『史学』第13号第3号, 1934年

若林俊輔 「母語をつぶすつもりか」——「英語公用語化」論に一言『英語青年』9月号, 2000年